

津島神社六社詣り

津島神社は、欽明天皇元年（五四〇）に西国対馬から須佐之男命が居森の地に御来臨されたのが始まりとされ、当初は「津島社」と呼ばれていました。

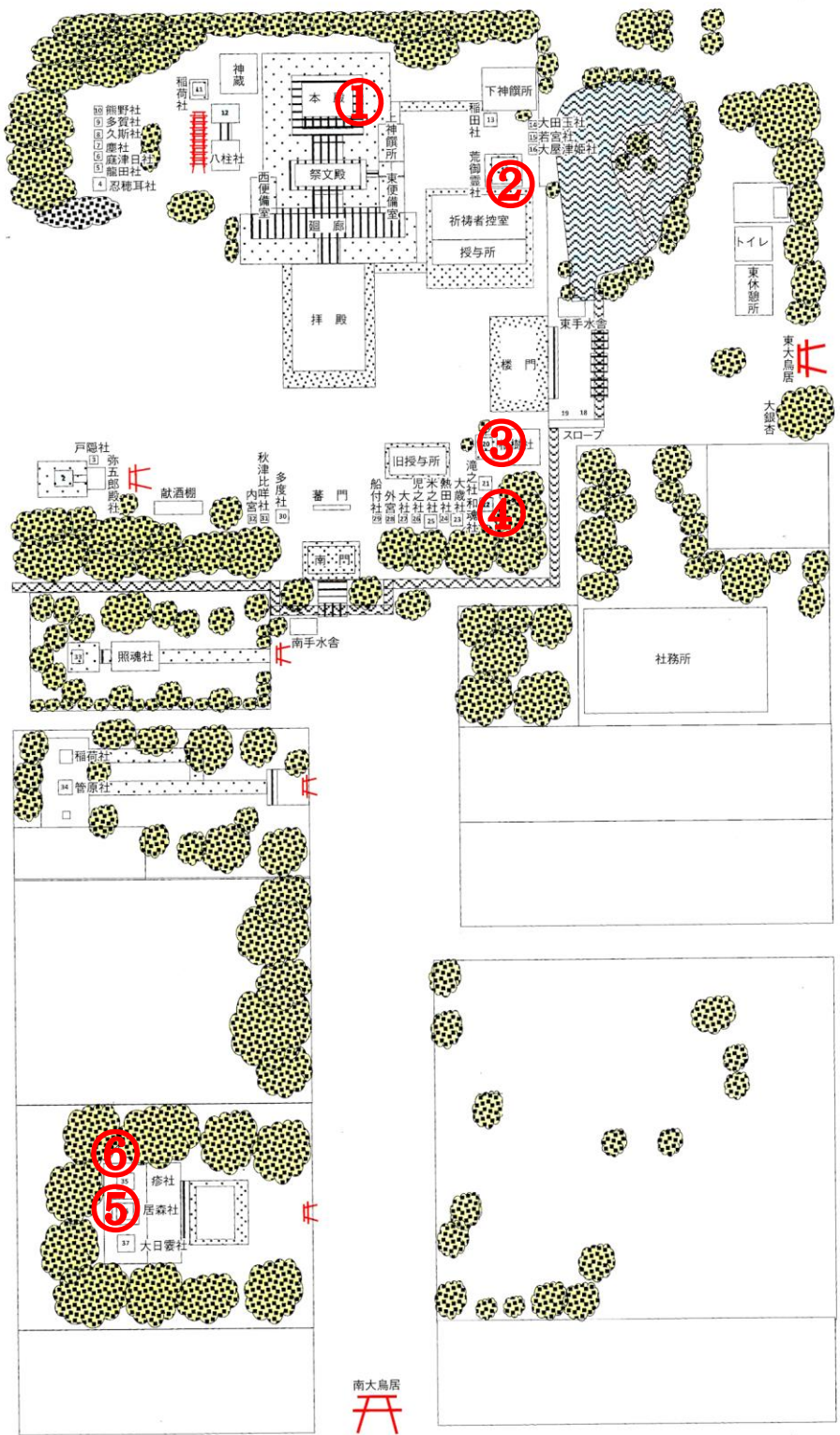
その後仏教が伝来し、「神仏習合」と言う考えが生まれ、日本の神々は仏の化身であるとされ、津島神社の御祭神は「牛頭天王」とされ、社名も「津島牛頭天王社」に替わり、明治の神仏分離まで続きました。

奈良時代「疫病」が流行し始め、平安時代には全国に広まりました。

当時、「疫病」は一つの集落が消滅する大変怖い病であり、当時の人々は「粗末に扱おうと大きな祟りをもたらす強い神に守ってもらう他は無い」と、牛頭天王を信仰するようになり、当時から江戸時代まで、津島神社の神職は「御師」として全国（当初は、琵琶湖東岸から鎌倉辺りまで）に御利益を布教して廻り、現在全国に三千社以上の御分霊社（町内社を含めると一万社とも）が有ると言われております。

古くより、日本の神々は荒魂（あらみたま）・和魂（にぎみたま）・幸魂（さきみたま、さちみたま）・奇魂（くしみたま）の四つの魂を持ち、四つの魂を併せ直霊（なおひ）と言いい、荒魂は活動、和魂は調和、幸魂は幸福、奇魂は靈感を担うとされ、人と同じような性格を持つと言われていきます。

津島神社では創始以来、ご祭神「建速須佐男之命」須佐之男命を奉られたお社を残しており、現在は本殿を始め、荒魂社・柏樹社・和魂社・居森社・疹社の境内六社でお祀り申し上げており、全国的にも大変珍しく、是非六社をお詣りいただき、大神様の御利益を授かれて下さい。





本殿 須佐之男命直魂
 三間社流造 桧皮葺
 昭和二十五年八月二十九日 国重要文化財指定
 嵯峨天皇の弘仁九年庚寅（八一〇）今の地に移り給ふた」とある。
 慶長十年（一六〇五）清洲城主松平忠吉（家康四男）の健康祈願の為、
 室政子の方の寄進。



荒御魂社（撰社）須佐之男命荒御魂
 一間流造 銅板葺
 昭和五十六年二月二十三日 県文化財指定
 元は八岐大蛇の霊を祀る「蛇毒神社」と称した。
 屋根は津島神社独特の古い形式を遺す。
 宝暦九年造営



柏樹社（撰社）須佐之男命奇御魂
 元は柏宮・柏社と云い、天平元年（七五七）神託により居森の地
 より此処に移した。
 宝暦十年造営



和御魂社（撰社）須佐之男命和御魂
 元は蘇民将来を祀る「蘇民社」と称され、姥が森（現愛西市町方新田）
 に鎮座されていたのを瑞垣内に移したとも伝えられている。
 正月四日に祭礼を斎行し、本社拜殿前に「茅の輪」を立て、一年の
 無病息災を願い輪くぐりを行う。
 宝暦十年造営



居森社（撰社）須佐之男命幸御魂
 本殿 一間流造 銅板葺
 社殿は、天正十九年（一五九一）豊臣秀吉母大政所の寄進。
 昭和五十六年二月二十三日 県文化財指定
 社伝によると欽明天皇元年に須佐之男命を最初にお祀りしたと
 伝えられている。
 屋根は津島神社独特の古い形式を遺す。



疹社 須佐之男命和御魂
 居森社に併せ造営
 古くより、疹と疱瘡の守神と厚く信仰され、棧俵（米俵の蓋）に一合
 徳利の酒と赤飯を載せて、赤い御幣を付、三本の藁縄で境内の木に
 吊るし、病の軽症を祈願する信仰が昭和三十年代まで見られた。

屋根は津島神社独特の古い形式を遺す。